

# 埼玉県退職校長会 会報

題字・石田孝作

第177号

令和5年1月

## 「空気」をつくる

埼玉県退職校長会副会長 関口 良子



「歩道をきれいに 中学生奮闘 先生の思い継ぎ 毎朝清掃」という新聞の見出しに惹きつけられた。登校時間前に、地域の人たちと言葉を交わし、落ち葉掃きをしている中学生が紹介されていた。所沢市立中央中学校のソフトボール部の女子中学生たちである。活動のきっかけが素晴らしい。一人の教師の「歩道をきれいにして、挨拶ができる学校にしたい」という思いで始めた取組に、生徒が感化されての活動である。11年間も受け継いでできているという。

この11年間、清掃をやらすにはいられない空気はどうやってできたのだろうか。その場だけの指示や命令では、当たり前と感ずるこのような空気は醸成されないであろう。尊敬している先生の取組に感化され、先輩から後輩へと受け継がれ、いつの間にか清掃をやらすにはいられない雰囲気・空気が醸し出されたからだと思う。今や地域にもその空気は広がっているという。

先日、渋沢栄一翁の御令孫、百歳になられた鮫島純子さんにお目にかかり、ご講演を伺った。鮫島さんは、「コロナは行動や思いを改めるいいチャンス、人とのつながりが大切だと気づき、心の時代がやってくる」と話され、ご自身「ありがとう」の心を習慣にするまでをお話しくださった。

まず、「ありがとう」と書いた小さな紙を、トイレ等家の要所要所に貼り、言葉にす

る。そして、「ありがとう」と言うクセ」ができると、トイレ以外の紙をはがしたのこのと。今でも、戦中戦後のトイレの紙さえなかった時代を思

## 先生！ 如何がお過ごしですか？



大里支部長 内田 眞弘

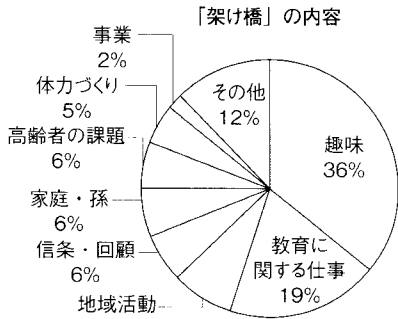
コロナ禍で、他人と顔を合わせ、おしゃべりや懇親会などを楽しむ機会が激減した。

い出し、「ありがとう」の気持ちをしやるという。自分にできる「やらすにはいられない空気」の作り方」といえる。

両者とも長く続けることによって、「空気」「クセ」を作っている。自分にできる空気を作り方やクセにするやり方で、いつの間にか子どもたちを包み込んで教育する空気づくりを心がけたい。

散歩、美術、音楽、文芸など多岐にわたる。中でも野菜作りが突出している。道を究め、「プロ」といわれる人もいる。コロナ禍で苦戦している人も多い。

次に「教育関連の仕事」に就いている人が19%おり、幼稚園から大学、行政など専門性を発揮し、幅広く活躍している。60代はここに関係している人が多い。



そこで本支部では会員相互が繋がりがあえるものとして「近況報告集 架け橋」を作成した。役員・理事のご尽力により、会員の90%から原稿が集まった。また、予算無くして始めたため、印刷製本も手作りで行った。配布後、「良いものを作ってくれ、有難い」等の感謝の声を多くいただいた。

「高齢者の課題」は病気、リハビリ、介護施設への通所、運転免許などがあげられているが、それらにうまく対応し、逞しく日々を送られている人が殆どである。

その他、研究に励んでいる人や喫茶店の開店、稲作、野菜の出荷など本格的な事業に取り組んでいる人もいる。

近況報告集の内容より、一人でも多項目書いている場合、一項目抽出

一番多く取り上げられたのは「趣味」である。内容は順に野菜作り、ゴルフ、読書、

コロナ禍でも、健康管理に努め、「知好楽」、楽しめる何かに取り組み続けることが大事と思う。